

さて、両親は毎年、過越祭にはエルサレムへ旅をした。イエスが十二歳になった時も、両親は祭りの慣習に従って都に上った。(ルカ福音書2:41)

両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜ、こんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんも私も心配して捜していたのです。」すると、イエスは言われた。「どうして私を捜したのですか。私が自分の父の家にいるはずだということを、知らなかったのですか。」(ルカ福音書2:48~49)

イスラエル人は過越祭、五旬祭、仮庵祭の三つの祭りを厳格に守っていた。中でも過越祭はエジプトの奴隷から解放された記念すべき祭りであったので、人々は大挙して、エルサレム神殿に巡礼に行き、出エジプトした先祖の苦難と栄光を思い、感謝の礼拝を捧げた。ヨセフ、マリア夫婦は毎年、巡礼に行っていたが、イエスが12歳になった時も、慣習に従ってエルサレムに上った。12歳は、律法の下に置かれる年齢、いわば、成人になる特別な年である。祭りの期間が終わり、帰路についた時、イエスはエルサレムに残っておられたが、両親は気付かずにいた。エルサレムへの巡礼は、親戚や近所の者たちが群れを作り、巡礼の歌を歌いながら旅をするので、両親は、イエスは群れの中にいるものと思っていた。一日分の道を進んだ時、いないことに気付き、親類や知人の中を捜したが、見つからなかった。道ではぐれたのではないかと、捜しながら、エルサレムまで引き返してしまった。

三日後によく、イエスが神殿の境内で教師(ラビ)たちの真ん中に座って、話をしたり質問をしたりしておられるのを見つけた。その場で、議論を聞いていた人々は、イエスの賢さと受け答えの素晴らしさに驚嘆していた。ヨセフとマリアはイエスを見て、驚き、母マリアが「なぜ、こんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんも私も心配して捜していたのです」と叱った。すると、イエスは「どうして私を捜したのですか。私が自分の父の家にいるはずだということを、知らなかったのですか」と答えた。マリアはイエスに夫ヨセフをあなたの「お父さん」と言っているが、イエスはエルサレム神殿を「自分の父の家」と言い、そこにいるのを知らないのですかと言っている。著者ルカは、イエスは幼い時から、神を父と認識していたと書いている。両親は、イエスの言葉の意味を理解することができなかった。それから、イエスは両親と共にナザレに帰り、両親に仕える生活を送られた。父と母を敬うことが第一義の律法であった。母マリアは、神殿で教師たちと議論を交わすイエス、そして、神殿を「自分の父の家」というイエスの言葉を心に留めていた。イエスは神と人から恵みを受け、知恵が増し、背丈の成長も著しかった。

ルカ福音書の1~2章には、イエスの誕生を中心に、洗礼者ヨハネの誕生からエルサレム神殿での少年イエスまでが書かれている。著者ルカは独自資料を基に「キリスト降誕」の物語を神話的に創作し、記述した。主イエスの公生涯を書くに当たり、プロローグとして、主イエスが誰であるかを伝えようとしている。ダビデの町ベツレヘムで降誕するという預言の成就、皇帝による登録の歴史的事実を踏まえながら、夜空を神の栄光で満たした天使の羊飼いたちへの出現、飼い葉桶に眠るメシアの降誕が告げられる。この奇跡はナザレのマリアという心砕かれたおとめを通して実現する。著者ルカは捨て置かれ、失われた者への救いがなると、美しく壮大な筆使いでキリスト降誕を描き出している。